

六篠会報

No.18

発行／神戸市灘区六甲台町1 神戸大学農学部内 ^{りく} ^{そう} ^{かい} 六篠会 (神戸大学農学部同窓会)
連絡用FAX : 078-881-2752 E-mail : rikusou@ans.kobe-u.ac.jp



神戸大学農学部附属食資源教育研究センター（正面）

CONTENTS

「会長挨拶」 北浦 義久	2	③関東支部 和泉 孔庸	8
「学部長挨拶」 眞山 滋志	2	④東海支部 上田 洋	8
同窓生は今 ①高橋 賢司	3	校友会だより 西川 欣一	8
②山下 伸雄	3	KUCだより 能宗 康夫	8
③辻 啓介	3	六篠会からのお知らせ	
附属農場から食資源教育研究センターへ 河野 和男	4	大学と同窓会の連携強化を進めよう!! 中村 直彦	9
研究室紹介 ①応用動物学科 形態機能学教育研究分野 河南 保幸	5	法人化大学支援へ総力結集 高橋 宣光	9
②植物資源学科 食料情報学教育研究分野 高橋 信正	5	庶務報告	10
③生物環境制御学科 農薬生化学教育研究分野 乾 秀之	5	14年度決算	10
④生物機能化学科 生物化学教育研究分野 山形 裕士	6	15年度予算	10
⑤食料生産環境工学科 生産機械学教育研究分野 山本 博昭	6	六篠会活動への連絡先	10
総会報告 代議員総会で活発な運営と財政の健全化を審議 中村 直彦	7	編集後記	10
支部会だより ①KOBEL六篠会 森川 功一	7	住所変更のあった人	別紙
②県六篠会 松本 幹夫	7		

「母校神戸大学と 共に発展を」

六條会会長 北浦 義久



六條会員の皆さん、お元気です。各分野において、活躍のことと心からお喜び申し上げます。

一昨年5月に六條会会長に就任してから、早や2年半が過ぎました。我が母校神戸大学の発展のために多くの同窓生や各界の方々との語り合い、支援の輪が着実に広がっております。

また、地元との連携が深まり、大学で研究された結果が、すぐ現場に役立つ技術として普及することが期待されています。目に見えた成果が問われる昨今ですが、我々卒業生だけでなく、地域住民にも理解され愛される大学として、着実な歩みが続けてほしいものと念願しています。

さらには、今年の10月1日から神戸大学と神戸商船大学とが統合し、新しく海事科学部として第11番目の学部が誕生しました。10月4日の記念式典に参加させていただきましたが、ますます発展していく神戸大学の将来にさらなる飛躍を確信することができました。

しかし、今、神戸大学は独立行政法人化を目指して大きくゆれ動いています。これからは大学自身が努力をして魅力ある大学をつくりあげて行かなければ取り残されてしまいます。こうした中で私達が築いて来た伝統が壊れていくのではないかと心配しております。

真山農学部部長を始め、農学部スタッフの皆さんのご努力によって、伝統を守りながら新しい時代の要請に応える農学部へと着実に進みつつあることは誠に喜ばしい限りです。

私達同窓生も母校神戸大学へ暖かい目を向け、積極的に支援をし、支えて行くことには、心から願っています。

今年度は、兵庫支部総会を始め、六條会総会にも出席させていただきます。それぞれの地域や職種で活躍されている同窓生の皆さんと近況や母校への思い・夢を語りながら楽しいひと時を過ごさせていただきます。全国各地で活躍されている六條会の皆さん、色々な機会をとらえ積極的に同窓生との交流の輪を広げていただき、思い出にひたるのもよし、新生神戸大学の未来を語るのもよし、有意義な時間を過ごしていただきたいものと願っております。

最後になりましたが、今年度の六條会報の発行に際しまして、一言ご挨拶をお知らせいたします。各状況をお知らせいたします。各位にはすでにご承知のように、来月4月から本学も独立行政法人化され国立大学法人神戸大学となります。大学ではそのための準備に怠りがないように励む日々であります。農学部の発展の基盤強化に向けた積極的な対処が必要と思っておりますが、皆様にも絶大なご支援を賜りますようお願い申し上げます。

発展する神戸大学農学部

農学部部長 眞山 滋志



六條会会員の皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

属する神戸大学大学院自然科学研究科が、10月1日付で大幅に改組されました。

を脱み農学部との連携強化を一層図り、資源開発部門、生産フィード部門並びに連携利用部門の3部門体制として、資源開発から生産までに関わる実学の教育研究および実習の場として発展することになりました。

本センターは本学の海における学術研究活動と対比される緑豊かなフィールドでの学術研究の場として重要で、総合大学としての基盤を成す貴重な施設でもあります。学生の総合教育を図る体験教育の場としても貢献できるものと思っております。

また、本年6月には地域社会に貢献する事業を推進するため「神戸大学農学部地域連携センター」が設立されました。農学部は、地元兵庫農林水産部、神戸市産業振興局、兵庫農林業協同組合中央会、生活協同組合コープ神戸、あわじ島農業協同組合などとの研究交流を行って参りましたが、本センターが地域が抱える農学分野の問題解決の拠点として発展したいと思っております。

さて、本年度の六條会報の発行に際しまして、一言ご挨拶をお知らせいたします。各位にはすでにご承知のように、来月4月から本学も独立行政法人化され国立大学法人神戸大学となります。大学ではそのための準備に怠りがないように励む日々であります。農学部の発展の基盤強化に向けた積極的な対処が必要と思っておりますが、皆様にも絶大なご支援を賜りますようお願い申し上げます。

さて、神戸大学は、10月1日付で神戸商船大学と統合いたしました。

神戸商船大学は海事科学部として神戸大学における第11番目の学部となりました。10月4日には、統合のための記念式典が神大会館六甲ホールにおいて、引き続き祝賀会が今春竣工致しました社会科学系アカデミア館において、ご来賓を含む関係者総勢250名余の参加を得て盛大に開催されました。神戸大学が真に「海に開かれた総合大学」として一層の発展が期待できる新しい門出であり、創立101年目の年に迎えた本学の歴史的出来事であります。

農学部は、10月1日付で神戸商船大学と統合いたしました。

農学部は、10月1日付で神戸商船大学と統合いたしました。

農学部は、10月1日付で神戸商船大学と統合いたしました。

農学部は、10月1日付で神戸商船大学と統合いたしました。

農学部は、10月1日付で神戸商船大学と統合いたしました。

農学部は、10月1日付で神戸商船大学と統合いたしました。

農学部は、10月1日付で神戸商船大学と統合いたしました。



六條会員の皆さん、お元気です。各分野において、活躍のことと心からお喜び申し上げます。

また、地元との連携が深まり、大学で研究された結果が、すぐ現場に役立つ技術として普及することが期待されています。

さらには、今年の10月1日から神戸大学と神戸商船大学とが統合し、新しく海事科学部として第11番目の学部が誕生しました。

しかし、今、神戸大学は独立行政法人化を目指して大きくゆれ動いています。

真山農学部部長を始め、農学部スタッフの皆さんのご努力によって、伝統を守りながら新しい時代の要請に応える農学部へと着実に進みつつあることは誠に喜ばしい限りです。

私達同窓生も母校神戸大学へ暖かい目を向け、積極的に支援をし、支えて行くことには、心から願っています。

今年度は、兵庫支部総会を始め、六條会総会にも出席させていただきます。

最後になりましたが、今年度の六條会報の発行に際しまして、一言ご挨拶をお知らせいたします。

同窓生は今

農業・生物系特定産業技術研究機構
中央農業総合研究センター
病害防除部長 高橋 賢司 (神P2回)



1971年に卒業し、今年で32年になります。学部内の組織が変わりましたが、当時あった植物防疫学科植物病理学教室で勉強しました。2年生で教室に入ったときには、4年生に篠山から移ってきた兵庫農科大学の最後の卒業生、3年生に神戸大学の最初の卒業生が先輩としておられ、同期の吉田、中尾、私の3名は、宮本雄一教授などの先生方や先輩方の指導を受け、家族的な雰囲気の中で学生生活を過ごしました。学生運動が盛んな頃で、大学封鎖で講義がなくなり、もっぱら卒業論の実験に精をこらして出します。教養学部で取りこぼした単位を大学紛争のおかげで試験が免除されレポートだけで勘弁してもらったことも今となつては懐かしい思い出の一つです。

卒業後、農林水産省に入り、東京都北区西ヶ原にあった農業技術研究所に配属



防除手段を有効に組み合わせる環境負荷の小さい病害防除技術を開発する研究の推進に取り組んでいます。環境保全となると、病害以外の分野との幅広い連携が必要ですが、北海道農試で病害虫、土壌肥料、気象、3分野を抱える研究室の責任者として、環境保全型農業の推進にはどのような研究をすべきに苦悶した経験が役立つように思います。それ以外にも現在の職場では、国際化への対応や食の安全・安心に関連する研究の推進も重要な課題です。たとえば、国際化への対応では、外国から新たに侵入する新病害の防除対策、リンゴの輸入に対する防疫措置の取扱いで現在WTOで厳しい交渉が行われている「リンゴ火傷病」の研究などに関わっています。「リンゴ火傷病」への対応では、北海道農試の時、「リンゴ火傷病」に類似する「ナシ枝枯細菌病」が再発し、「リンゴ火傷病」が日本に存在するや否が重要な問題となり、両病害の異同を明らかにする研究で行政とやりとりした、その経験が役立つと思います。

農業・生物系特定産業技術研究機構
中央農業総合研究センター
主任研究員 山下 伸雄 (神C15回)

早いもので大学を卒業し、地元白鶴酒造に入社してから20年近い歳月が流れました。入社後すぐに酒造りの現場に配属され、肉休労働中心の毎日を送ったのも遠い昔のように感じます。その後、品質管理業務を経て、研究開発部門に配属され現在に至っています。配属後、まもなく酵母菌の研究

ます。食の安全・安心ではマイコトキシンを産生する「ムギ赤かび病」に関わっています。これにも北海道や九州での耳葉菌や経験が役立つと思います。あまり先を考えずその時々を夢中でやってきましたが、振り返ると、前の研究室で次の研究や仕事の布石になったように思います。農業研究の目的が、農産物や農家のため以外にも環境保全や食の安全、国際化など多様になり、国益や国民の信頼確保に直接関わる研究課題も少なくありません。現在、その重要な研究課題のいくつかに関わりあっていることはやりがいを感じますが、責任も重く、これからは緊張して取り組んでいきたいと思えます。

農林水産省下の研究所は2001年4月に法人となり、着実に研究者の意識は変わりつつあります。大学も法人化を目前にしていますが、法人化後も神戸大学農学部が私を含め卒業生の心のふるさとであり、多くの個性豊かな後輩をこれからも送り出しているのだと思うにしたいと思います。

留学中には南米ブラジルのカンピナス大学に長期滞在させてもらう機会に恵まれ、日本とはかなりかけ離れた生活を味わうことができました。南米滞在時のエピソードには事欠きませんが、ブラジル中央部に位置するパンタナールという大湿原地帯でピラニアなどの猛魚を釣り上げたことやポリビアで女性がトウモロコシを噛んで作る口噛み酒を入手したことは私の忘れ得ない思い出となっています。1991年本社に戻ってから93年産官学共同プロジェクトに参加し、ここでは恩師の新家 龍先生や兵庫県立農業技術センターの吉田晋弥氏(神P13回)、池上 勝氏(神A15回)から御教示を頂きました。また酒米のDNA多型解析に関連した仕事では住友化学工業宝塚研究所に1995年当時在籍しておられた中島(細見)有紀氏(神C18回)にお世話になりました。この年は阪神大震災が起り、大学も多大な被害に遭われたようですが、私の会社も極めて甚大な被害を受けました。そのダメージの大きさを一時は新しい職を見つけないといけないのではないかと真剣に考えていたのが今では嘘のようです。その後は麹菌の研究を中心に仕事を行っていましたが、清酒醸造と聞かれてアナクロ的あるいは神秘的なイメージを持たれる方も少なくないのには思いますが、清酒醸造の中で重要な役割を担う微生物・つまり酵母菌や麹菌も

人間と同様に全ゲノムがほぼ解明されており、遺伝子のレベルで醸造現象を解明しようという傾向も強まっています。ただ麹菌に関しては「酵素の宝庫」と言われるだけあって、ゲノムが解明されても機能未知の酵素遺伝子が多く存在するようであり興味尽きない研究対象と言えます。私も今まで麹菌から2つの新規遺伝子を発見しました。1つは麹菌に薬剤耐性を付与する遺伝子で、現在まで麹菌においては形質転換系時の優性選択マーカーとなる薬剤耐性遺伝子が見いだされていなかったため、この遺伝子は宝パイオから販売され国内を中心とする各研究機関で利用されています。もう1つは清酒にムレ香という劣化臭を発生させる酵素遺伝子で、この仕事を論文にまとめることで神戸大学から学位を頂きました。この際、微生物機能化学教室の青木健次先生、村上周一郎先生に多大な御指導を賜りました。この劣化臭発生遺伝子はそのノックアウト(遺伝子破壊)によりムレ香の発生しない麹菌の分子育種にもつながりましたが、BIO-2000の分子育種、遺伝子組み換えは食品分野に関する限り消費者に強い抵抗感があるため実用化には至っていません。私見ではありますが、日本における遺伝子組み換え食品に対するアレルギーは一般消費者への正確な情報提供の欠如にも起因していると感じます。産業界および農学研究の飛躍的發展のためにも大学を中心とした正しい啓蒙活動が必要ではないかと考える今日この頃です。



兵庫農大4年の卒研では、生物化学研究室の吉川助教の部屋でアルギン酸ナトリウムの微生物分解をテーマに頂き、アルギン酸分解酵素の結晶化を夢見て研究しました。反省すると入室した時には多数あったガラス器具が卒業の時には激減していたのを今でも鮮やかに思い出します。当時プロレスラーにデストロイヤーというのがあり、これをあだ名にされた者もいました。ある朝、実験室にいくと大切な振盪培養器が変な唸り声をあげて壊れていました。これがないと実験が出来ないので、予算のないときに新調してもらった事件もありました。いずれにしろ、これらの経験はその後器具をほとんど壊さないという貴重な能力に結びつきました。また、同じ効果を期待できる安価な実験システムを考案を模索するという習性に結びついたと確信しております。

昭和39年に卒業後、1年間民間企業を経験し、このとき原価計算という言葉の意味を悟り、研究にも効率が大切という経験を積みました。その後、佐々木教授の有機化学研究室で唯一の研究員として頂き、台風で倒れた農大テニス場のポプラの皮のフラボンを飽きずに連日抽出しました。

41年の新年から、右も左も判らない東京新宿の国立栄養研究所に赴任しました。なにしろ、厚生省ですから医者や薬屋の世界です。まずは先輩研究者の博士論文の分析手伝いやラットを使った寿命実験、自らの体での基礎代謝測定などに追われる毎日でした。次第に実験要領もよくなり、少し暇ができたので、自分のテーマも模索しました。当時、外国ではペクチンに血清コレステロールの低下作用があるという論文が報告されており、日本人独自の食生活に包含される同じ高粘性のアルギン酸やこんにゃくのグルコマンナン

兵庫県立姫路工業大学環境人間学部教授
学部長 辻 啓介 (兵C12回)



撃をしてくれた訳です。今では難消化性オリゴ糖が機能性食品のプレバイオティクスとして注目を浴びていますが、卒研でもオリゴアルギン酸らしきものをペーパークロマトで検出しており、惜しいことをしたと思っております。それほど当時の農大の研究は時代の先端を走っていたといえるでしょう。

ンでの同様の研究を計画し、実験したところ、これらもコレステロール低下作用を持つことを知りました。これなら国の内外の優秀な研究集団と競合しないのでゆつくりと仕事ができるのではないかと期待して、翌年の日本栄養・食糧学会で発表したところ、奇しくも私と入れ替わりに栄研から徳島大栄養学科に転出された桐山先生がほぼ同様の研究結果を発表され、「人は同じことを考えるものだなあ」と感じ入りました。これが日本での食物繊維の研究の先駆けとなったようです。

その後、食物繊維と血圧との関連について研究を始めるときに、アルギン酸のカルボキシル基を思い出し、「食物繊維のイオン交換反応と降圧作用」という、世間の反響を呼ぶ結果に結びつきました。卒研での交際相手はいつまでも援護射

工大の環境人間学部になったのは平成10年4月でしたが、このとき岸田忠昭(現名誉)教授のご紹介で33年ぶりに運よく兵庫県に戻ることができました。大震災で被害を受けた郷土の経済復興に微力ながら力を尽くしたいと念じています。

母校の神戸大農学部も間近になって嬉しい次第です。佐々木先生は姫工大の名誉教授の第一号です。ここもなにか母校のような気分がします。

本年5月に「食物繊維の栄養学的意義に関する研究」で日本栄養・食糧学会の学会賞を頂き、今後ともさらに精進したいと願っている次第です。

産官学を渡り歩いた私ですが、卒研のたった1年が人生に大きな影響を与える1年であったと今更ながら実感し、母校に感謝している現状です。

附属農場から食資源教育研究センターへ

センター長 河野 和男

神戸大学農学部には50有余年の歴史がありますが、附属農場も加西市に移転してからだけでも34年になります。農学部あつての附属農場ですが、附属農場職員は附属農場あつての農学部との理解のもと長年活動を続けてきました。21世紀となり大学の独立行政法人化が目前に迫り、農学部の強化再編成も必至とされています。農学の使命も単なる食糧生産安定増進に止まらず、生物資源、環境資源の公平な利用、食の安全性確保、環境への持続的対応等、人間の生活に根本的に関わる事に及びつつあります。

この背景のもと附属農場は食資源教育研究センターへと機構変えになりましたが、その根本理念は生産教育農場から研究教育センターへの脱皮にあります。この過程で、食資源教育研究センターは、目下多くの農学研究の現場で過度に専門化され細切れ状態にある研究の取り組み方から距離をおき、農業及び農業生産により直結しかつ総合的な研究を進める場としての役割が期待されています。独立行政法人化がどのように進行するか定かでない部分もありますが、その大きな目的の一つが大学の活動の社会に対するAccountability(説明責任、結果責任)をより明らかにする事にあるのには疑いがないでしょう。農学は必要なのか、農学部は必要なのか、日本に50も60も農学部は必要なのか、神戸大学に農学部は必要なのか、という質問の全てに正面から答えることが必要となるわけです。

神戸大学農学部附属研究センターという位置を考えたい場合、そこで真に期待される役割は食料資源、遺伝資源、食の安全、環境といった事柄をキーワードとして世界に発信できる研究成果をあげる事にあるでしょう。そこでは教官の研究・農学者としての一層の足腰の強さが求められ、技術官、事務官が自身の仕事とサポート活動をより社会的に明確な枠組みで積極的に取り組む必要があります。3はやる事なす事のほぼ全てに積極的に取り組み実習を研鑽と達成感(楽しい、興味深い、おもしろい)の場と捉えているようです。教官側にとつては、最後の1/3の学生だけを相手にして実習を行えば楽だろうという感覚もありますが、それ以外の学生にも農作業を通じてコミュニケーションを築き上げ、興味と達成感を引き出すのがチャレンジではないかとの感もありません。学生の心情・都合を最大限尊重して実習をそれに合わせようとする行き方と、いつの世でも先生や年よりはいくどく説教くさいもの、学生に嫌われようと



研究室紹介

応用動物学科動物機能調節学講座 形態機能学教育研究分野

教授 河南 保幸



形態機能学研究室所属の教官および学生（平成15年10月撮影）

昭和41（1966）年4月1日、神戸大学に農学部が設置され、翌年から3年間で、兵庫農科大学の5学科27講座が順次9講座ずつ国立移管されました。かつて兵庫農科大学の畜産学科では、学科を構成する6講座のなかに家畜解剖学講座と家畜生理学講座があり、それぞれ講座名称の科目の授業を担当していました。これらの授業科目で取り扱われていた内容は、動物学を学ぶ上でも重要なものになって、応用動物学における基礎科目の授業内容として主要な部分をなすものでした。このようなことから、その後の農学部における再編改組に

あたって、従来の2学問分野を統合し、平成11（1999）年4月に形態機能学教育研究分野がスタートしました。現在の応用動物学は、動物学と動物機能調節学の2つの大講座からなり、当教育研究分野は後者の講座に所属しています。

私達の研究室は、平成13（2001）年秋に農学部学舎から新築の自然科学総合研究棟に移転し、オープンラボ様式の実験室が研究の拠点となっています。現在、当分野の担当教官は、河南保幸教授、北川浩教授、千田廉助手および塚原伸治助手の4名で構成されています。また学生は、大学院博士後

期課程2名、大学院博士前期課程（従来期課程）7名、修士課程に相当）7名、学部4年生5名、研究生2名および留学生1名の合わせて17名が在籍しています。

この教育研究分野における教育としては、学部授業4科目、大学院前期課程授

業2科目、大学院後期課程授業2科目のほか実験、実習および演習などを担当しています。また研究室では博士・修士論文や卒業論文の作成のための研究指導が行われています。一方、研究に関しては、生命の成り立ちと仕組みについて明らかにするため、動物の体の構造と機能との関係を組織学的、細胞学および生理学的に追究しています。現在進めている主な研究の内容は次のとおりです。1. 消化管における免疫応答を主体とした特異的免疫防御機構と免疫応答に依らない非特異的免疫防御機構との関連について研究を行っています。すなわち、アポトーシスによる粘膜

上皮細胞の細胞交代等の非特異的免疫防御と、食餌性抗原に対する局所免疫応答並びに同時に誘導される経口免疫寛容との関連について説明を進めるとともに、これらのメカニズムについての研究を行っています。2. 消化管における常在細菌の定着やその制御のメカニズムについても研究を行っています。3. 哺乳類の赤血球は形成過程で核を捨てますが（脱核）、この現象とアポトーシスとの関連について研究を進めるとともに、赤血球形成の調節機構についても研究を行っています。4. 生体内カルシウムの代謝調節に中心的な役割を果たしている骨組織について、その形成機構の究明とビタミンDや各種ホルモンの作用の機能形態学的解析を行っています。5. 外来遺伝子導入のためのベクター細胞として注目されている原始生殖細胞（精子や卵子に分化する細胞）の発生、移動および増殖の機構を解明す

るとともに、有用なトランスジェニック（形質転換）動物の作出を目指して研究を進めています。6. 脳機能と疾病やストレス応答に関連する特異的な行動様式を各種の動物を用いて研究し、それらの成果を解析方法の特許化、行動解析ソフトウェアの開発、デンマーク農務省との共同研究など産学連携による研究コンソーシアムの形成に結びつけることができました。また痴呆症の発症メカニズムと予防・疾病進行抑制が期待できる治療法について、モデル疾患動物を用い、神経免疫学的

に研究しています。7. 哺乳類の雌雄で異なる生殖現象を支配調節している脳の機能と構造を調べ、脳の雌雄差および性的な分化過程を明らかにする研究を行っています。

植物資源学食料環境経済学講座 食料情報学教育研究分野

教授 高橋 信正

食料情報学分野の構成員は私と金子治平助教の2名です。私は同時に、大学院自然科学研究科社会基盤科学領域食料フィールド科学専攻（前・情報メディア科学専攻）の専任でもあり、情報大講座の専任でもあります。私は平成9年に、農林水産省研究機関の当時の農業研究センター経営管理部（部長）から移ってきました。研究部では当初、稲作、園芸作、畜産、草地、養蚕の部門別の研究室に加え、会計、経営設計、機械の経営研究室がありました。そのため、技術関係も含め多くの経営関係の研究を浅く広く行っておりま

した。私の専門分野は、「農業生産組織論」です。農業における多くの組織問題を対象としており、修士論文、博士論文からこれまでの研究業績のほとんどはこの範囲にはい

るに研究しています。7. 哺乳類の雌雄で異なる生殖現象を支配調節している脳の機能と構造を調べ、脳の雌雄差および性的な分化過程を明らかにする研究を行っています。

上記の研究は、機器分析センターや連携創造センターなどの学内施設に設置されている大型精密機器なども利用しながら進められており、得られた成果は、関連分野の学会で毎年発表しています。今後とも当分野における教育・研究内容の一層の向上を目指して、研究成果の公表と集積に努めたいと考えています。

来年から大学が法人化され、今後、研究方向を法人化に沿った方向に転換することも大切だと思います。農学という科学は医学、工学、教育学等と同様にあくまでも応用科学です。理学、経済学等といった基礎（純粋）科学とは性格が違います。だから、農学は地域農業、農村、農家に直に役立つような研究が期待されています。どんなに立派とみられる研究成果でも、農家が利用しなかったり、日本農業が残っているかどうか分からぬ10年後、20年後にしか役立たないものであればほとんど意味はありません。法人化をきっかけに、農学部の技術系、社系を問わず、一つの課題に向かって協力して解決していく必要があると考えています。

私の所属する自然科学研究科の分野には私以外に、昨年京大から移ってきました伊庭治彦助手がいます。以下では、金子治平助教、伊庭治彦助手の専門分野の紹介をします。

金子助教教授・これまで、情報の一つとしての政府統計、とりわけ作物統計や国勢調査について、日本とイギリスとを比較しながら、その歴史的な形成過程をみることによって、情報と国家の関係を探らにかしようにしてきました。また、さらに、教養原論で「現代と社会」を担当しているために食料と農業以外の領域についても研究をせざるを

生物環境制御学食料生物制御学講座 農業生化学教育研究分野

乾 秀之（神戸24回）

農業生化学研究分野の大川秀郎教授、今石浩正助教、乾秀之助手は、平成13年4月に神戸大学遺伝子実験施設が改組されて新たに発足した「遺伝子実験センター」において教育研究活動を行っている。「遺伝子実験センター」は「環境遺伝子群」のうち、と

りながら、イギリスに1年間留学させていただいたこともあって、今夏にイギリスの社会統計に関する訳書（共訳）も公刊することができました。それらも一段落つき、最近では、食品安全基本法など食の安全・安心についての、法制度や政策についての研究に取りかかりつつあります。

伊庭助手・農業経営学の重要な研究対象の一つである地域農業組織の形成・管理に関して、状況適応理論、経営戦略論等を分析枠組みとし、理論的・実証的分析を行っています。

として一体化して研究を推進している。また、平成14年7月には研究室が自然科学総合研究棟1号館7階に移転した。大川プロジェクトでは、生物と環境の係わりに関与する

大川プロジェクトでは、生物と環境の係わりに関与する

大川プロジェクトでは、生物と環境の係わりに関与する

大川プロジェクトでは、生物と環境の係わりに関与する

大学院博士後期課程2名、大学院博士前期課程（従来期課程）7名、修士課程に相当）7名、学部4年生5名、研究生2名および留学生1名の合わせて17名が在籍しています。

この教育研究分野における教育としては、学部授業4科目、大学院前期課程授

業2科目、大学院後期課程授業2科目のほか実験、実習および演習などを担当しています。また研究室では博士・修士論文や卒業論文の作成のための研究指導が行われています。一方、研究に関しては、生命の成り立ちと仕組みについて明らかにするため、動物の体の構造と機能との関係を組織学的、細胞学および生理学的に追究しています。現在進めている主な研究の内容は次のとおりです。1. 消化管における免疫応答を主体とした特異的免疫防御機構と免疫応答に依らない非特異的免疫防御機構との関連について研究を行っています。すなわち、アポトーシスによる粘膜

上皮細胞の細胞交代等の非特異的免疫防御と、食餌性抗原に対する局所免疫応答並びに同時に誘導される経口免疫寛容との関連について説明を進めるとともに、これらのメカニズムについての研究を行っています。2. 消化管における常在細菌の定着やその制御のメカニズムについても研究を行っています。3. 哺乳類の赤血球は形成過程で核を捨てますが（脱核）、この現象とアポトーシスとの関連について研究を進めるとともに、赤血球形成の調節機構についても研究を行っています。4. 生体内カルシウムの代謝調節に中心的な役割を果たしている骨組織について、その形成機構の究明とビタミンDや各種ホルモンの作用の機能形態学的解析を行っています。5. 外来遺伝子導入のためのベクター細胞として注目されている原始生殖細胞（精子や卵子に分化する細胞）の発生、移動および増殖の機構を解明す

るとともに、有用なトランスジェニック（形質転換）動物の作出を目指して研究を進めています。また研究室では博士・修士論文や卒業論文の作成のための研究指導が行われています。一方、研究に関しては、生命の成り立ちと仕組みについて明らかにするため、動物の体の構造と機能との関係を組織学的、細胞学および生理学的に追究しています。現在進めている主な研究の内容は次のとおりです。1. 消化管における免疫応答を主体とした特異的免疫防御機構と免疫応答に依らない非特異的免疫防御機構との関連について研究を行っています。すなわち、アポトーシスによる粘膜

上皮細胞の細胞交代等の非特異的免疫防御と、食餌性抗原に対する局所免疫応答並びに同時に誘導される経口免疫寛容との関連について説明を進めるとともに、これらのメカニズムについての研究を行っています。2. 消化管における常在細菌の定着やその制御のメカニズムについても研究を行っています。3. 哺乳類の赤血球は形成過程で核を捨てますが（脱核）、この現象とアポトーシスとの関連について研究を進めるとともに、赤血球形成の調節機構についても研究を行っています。4. 生体内カルシウムの代謝調節に中心的な役割を果たしている骨組織について、その形成機構の究明とビタミンDや各種ホルモンの作用の機能形態学的解析を行っています。5. 外来遺伝子導入のためのベクター細胞として注目されている原始生殖細胞（精子や卵子に分化する細胞）の発生、移動および増殖の機構を解明す



るとともに、有用なトランスジェニック（形質転換）動物の作出を目指して研究を進めています。また研究室では博士・修士論文や卒業論文の作成のための研究指導が行われています。一方、研究に関しては、生命の成り立ちと仕組みについて明らかにするため、動物の体の構造と機能との関係を組織学的、細胞学および生理学的に追究しています。現在進めている主な研究の内容は次のとおりです。1. 消化管における免疫応答を主体とした特異的免疫防御機構と免疫応答に依らない非特異的免疫防御機構との関連について研究を行っています。すなわち、アポトーシスによる粘膜

りわけ、シトクロムP450 遺伝子について、その分子多様性と機能並びに遺伝子発現調節機構の解明を行い、P450 遺伝子機能に基づく難分解性有機汚染物質、例えば、ダイオキシン類、ある種の残留農薬、環境ホルモン類などのモニタリング及び負荷軽減に関する新技術の開発を行っている。また、哺乳動物の高度に発達した抗原・抗体反応及びホルモン受容体の機能を利用して、難分解性有機汚染物質を迅速、簡便、かつ、高感度にモニタリングできる新技術の開発を行っている。

次に示す2つのテーマについて主に研究を行っている。

1)「環境遺伝子」シトクロムP450の分子及び機能の多様性と遺伝子発現調節機能の解明に関する研究

シトクロムP450は植物において分子多様性であり、主に、二次代謝産物の生合成並びに外来脂溶性異物の代謝に関与しており、機能も多様化している。そこで除草剤代謝に係わる新規P450遺伝子をクローニングし、その酵素機能や遺伝子発現調節機能を利用する。これらの機能を利用して難分解性有機汚染物質の負荷軽減やモニタリングに関する新技術開発を遺伝子工学的手法を用いて行っている。

2) 生物機能を利用した難分解性有機汚染物質のモニタリングに関する研究

(1)哺乳動物が持つ高度に発達した抗原・抗体反応の特異性をもとに、難分解性有機汚染物質などに特異的に反応するモノクローナル抗体を調製して、対象化学物質を測定する免疫化学測定法並びに試料

の前処理法を遺伝子工学的手法を用いて開発する。また、(2)哺乳動物のエストロジェン受容体、ダイオキシン受容体などの制御下にレポーター遺伝子を発現する遺伝子組換え植物を作出する。これら植物がエストロジェン様化合物、ダイオキシン類などに応答しレポーター遺伝子を発現して、レポーター機能を検出することによって汚染現場をモニターする。

これらの研究成果が実り、平成13年3月日本農薬学会において乾秀之助手は「薬物代謝酵素導入植物の作出とその残留農薬低減効果」で日本農薬学会奨励賞を受賞した。また、平成15年6月にハワイで開催された第3回環太平洋農薬学会で大学院博士後期課程3年辻井久恵さんは、「除草剤多剤耐性ロリウムバリオタイプ(CYP1)遺伝子を取得してそれが除草剤代謝に関与していることを解明した研究」でポスター賞を受賞した。さらに、平成15年9月にニューヨークで開催されたアメリカ化学会秋季大会において、大川秀郎教授はアメリカ化学会国際賞農業研究を受賞した。

なお、大川秀郎教授は平成16年3月末日に定年退職される。その機会に平成16年3月20日(土、祝日)の午後12時川記念学術交流会館で講演会「産官学連携によって研究開発はかか進化したか」を開催する計画を進めており、大川教授の最終講義と5名の講演を予定している。詳細は、<http://www.rceg.biosing.kobe-u.ac.jp/doc/pestic-home.html>に掲載いたします。

生物機能化学科生物機能分子化学 講座 生物化学教育研究分野

教授 山形 裕士(神C5回)

平成14年4月から相菌泰生前教授(前農学部部長)の後を引き継ぎ、生物化学研究室を担当させていただきました。多くの立派な卒業生を輩出した伝統ある本研究室の運営を任されていることを思いますと身が引き締まる思いです。私自身、神大農学部の5期生で、本研究室で吉川三吉教授、岩崎照雄助教授(元農学部長)、清原利文助手(当時)の三先生に卒業論文のご指導をいただきました。あまり勉強はしませんでした。が、実験は一生懸命やっただけで、お陰様でこの母校に戻っていただく格好ですが、今では昔のことに棚上げて不勉強な学生には厳しく接していただきます。時々同級生が研究室を訪ねてくれ、懐かしい昔話を花を咲かせています。

本年3月、東大分子細胞研究室を進めています。また、好冷菌由来の低温活性酵素の構造と機能の相関を研究している院生もいます。研究テーマは多岐に渡っていますが、遺伝子発現調節機構の解明が中心の課題となります。

近年の生化学・分子生物学の発展は誠に目を見張るものがあります。いくつかの生物の全ゲノム構造が解明され、分子遺伝学、細胞生物学の発展と相俟って、我々が院生の頃は想像もできなかったような、小学生の子供が抱くような、生命に対する素朴な疑問に答えようという研究が可能となってきました。このような素晴らしい時代に私達もささやかなりとも学問的貢献ができればと最新の実験手法を積極的に取り入れ、「植物は情報としての光をどのように認識するのか」「遺伝子はそのようにして決まった時間に決まった場所で働くのか」といった問題に挑戦していきます。一方で独立行政法人化に伴う大学改革の流れの中で、基礎研究分野といえども産学連携など社会貢献を視野に入れた研究も指すべく、例えば「有用トランスジェニック果実」等、消費者のために第一、第三世代の遺伝子組換え作物の作出を目標に研究しています。

学生は、博士後期課程12名、前期課程(修士課程)12名、4年生7名の計20名(内女子6名)です。近年修士課程入学者が増加する傾向にあり他大学からの入学生も多く、お互いに刺激しあっている研究室の活性化に繋がっていると感じます。反面、大勢の学生の中には途中でドロップアウトする学生も時々います。前向きな進路変更は良いのですが、そうでない場合はコミュニケーション不足が一因かと



研究室メンバー(平成15年10月撮影)

自責の念にもかられます。しかし大学院の大衆化と共にモラトリアム時代を大学院まで持ち込まれては困るといのが正直な言い分です。「卒業までに自分の将来について必死になって考えよ」が、学部新入生に対する最近の私の口癖になってしまいました。こういった現象は、昨今「フリーター」や「引きこもり」が社会問題化していることと無縁ではない気がします。もちろん旺盛な研究・学習意欲を持ち、将来が期待できる優秀な学生は大勢います。本研究室では4年生の大半が博士前期課程へ進学していますが、学部、修士を含めた最近の就職状況もこの不況の時代には好調です。ただ、博士後期課程に進学する学生が少ないのが気掛かりです。21世紀は生物学(農学)の世紀といわれています。日々、院生や学生諸君と接する中で研究への夢を語り合い、明日の我が国の科学技術を担う人材を育てなければならぬ重責を強く感じるこの頃です。今後とも六篠会同窓生の皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

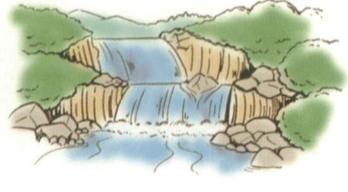
食料生産環境工学科バイオシステム 工学講座 生産機械学教育研究分野

教授 山本 博昭(兵A12回)

十年一昔と言いますが、特に本学科を一言以前に卒業された方々にとっては、現在の学科・講座・研究室の変遷・構成が複雑で分かり難い点が多いと思われる。当「生産機械学研究室」の源流は、兵庫県立兵庫農科大学時代の農学科における一講座であった「農業工学研究室」だと言えませんが、神戸大学への国立移管を前提とした体質改善によって「農業生産工学科」が昭和39年4月に誕生し、その際上記研究室が農業土木と農業機械の2分野に分かれ、後者が「農業機械学第一講座」として独立したのが発祥だと解釈されます。以来今日に至るまでに学科名称は農業生産工学科、農業工学科、生産環境情報工学科、食料生産環境工学科と四度改変し、講座名(小講座制)も「農業機械学第一」から「農業動力学」へ昭和49年4月に改称、そして平成5年度の学部改組による大講座制の導入から、農業機械系は「生物生産工学大講座」(平成15年度より「バイオシステム工学大講座」に改称)を構成し、旧農業動力学講座は「生産機械学」と「生産計画学」(いずれも教育研究分野)へと発展的に改変して参りました。従って現在の当研究室は、「バイオシステム工学講座」を構成する4つの教育研究分野(生産機械学、プロセス工学、

生産情報学、生産計画学)の一つとして位置づけられます。これらの変遷は、変革する時代や社会の要請、農学を中心とする学問領域の変化、受験生の動向を鑑みた学内情勢等により逐次改変されて参りましたが、それぞれの時代に在学・卒業された先輩・諸兄弟におかれましては、学科・研究室等の名称が異なりましても必ずや基幹となる研究室は存続しておりますので、気軽に来訪下さり、ご指導ご鞭撻をお願い致します。

生産機械学研究室は、教官スタッフの入れ替わりという点で丁度今転換期を迎えています。改組後約8年半の間当研究室の教育研究に尽力された徳田勝助手が都合により本年3月に民間企業へ転職され、現在、教授の山本博昭と平成12年4月に近畿大学から本学へ着任した伊藤博通講師(前任者中嶋洋助教は京都大学助教へ配置替)の2名ですが、山本は来年3月に定年退職しますので平成16年度からは伊藤講師1名となる可能性があります。この様な状況下で本年度の専攻学生数は例年に比べると少なく、大学院生(自然科学研究科博士前期課程)5名(M2-4名、M1-1名)、学部生1名の計6名ですが、少数精鋭をモットーにゼミ・研究活動に励んでいます。





時代の流れと共に本研究
室の中心研究課題も変わっ
て参りました。山本は以前
から、果実振動収穫機の設

植物工場における植物生産
の最適環境を創出する制御
技術の開発、具体的には、
植物のオンライン成長シス

テムを同定し、特に本年度
は植物体内に蓄積される硝
酸態窒素を低減させる生育
環境制御要因の抽出、②酒
米の品質判定アルゴリズム
の確立と判定機器の開発、
③ロータリ耕うん土壌破砕
度センシング技術の開発、
④丹波黒大豆粒および鞘の
品質判定技術と選別機の開
発、等であり、その他に従
来からの流れを継承した、
農業用歩行ロボットの試作
開発と脚部の駆動制御シス
テムに関する研究、があり
ます。いずれの課題も、兵
庫県の試験機関や企業との
連携、科学研究費補助金の
援助下で遂行しています。
平成16年度からいよいよ
国立大学法人化が実施され

ることとなり、本学部も生
き残りを掛けた極めて厳し
い情勢下に突入します。本
学科は、社会的評価の向上
と教育面の充実を図るため
平成16年度にはJABEE(技
術者教育認定制度)の認定
を受けるべく現在準備を進
めています。学科や個々の
研究室が落ちこぼれること
なく持続・発展していくた
めには、産官学の連携・共
同による研究活動の活発
化・研究費の確保が必然と
なっており、各院で
活躍の同窓会員の皆様には、
今後ますますのご支援、ご
協力を賜りますようお願い
いたします。

総 会 報 告

代議員総会で活発な運営と財政の健全化を審議

代表理事 中村 直彦(神Z1回)

平成15年度の代議員総会
を5月10日に、神戸大学ク
ラブ(KUC)の事務局とな
っている神戸元町駅前の
「本館 牡丹園」で開催した。
総会では、旧年度の報告
と新年度の計画を中心に審
議したが、とくに同窓会事
業の活発な運営と財政の健
全化について議論を行った。

まず、北浦会長の挨拶、
会議の成立報告のあと、平
成14年度の事業報告と会計
報告並びに監査報告。続い

て、平成15年度の事業計画
案と予算案について審議し
た。とくに約30年間据置い
てきた六條会の入会金の改
定を15年度から実施したこ
とにより、充実した計画内
容となった。

また、2年の任期となっ
ている役員改選については、
人事異動等で交代された方
を除いて、現役員がもう一
期の2か年間を継続して世
話をすることによって承された。
(会計報告、予算、役員名簿

は、後記の庶務報告のとお
り)
学友会役員からは、昨年
実施した「神戸大学創立百
周年記念募金」についての
報告があった。このたび、
全学で90,000千円を
超える募金が集まったが、
九十周年の募金と合算して、
総額2億円の「国際交流事
業促進基金」を設け、「平成
16年度より世界の発展に積
極的に寄与する人材の育成
を行う事業をスタートさせ

る」の野上学長からの礼
状が届いた。
六條会からは、177件、
2,778千円の募金が集
まっており、我が農大、農
学部卒業生が母校を慕わ
れる賜物と感謝する次第で
す。



支部会

だより

KOBE六條会 森川 功一(神C11回)

KOBE六條会は、兵庫農
科大学、兵庫県立農業短期大
学及び神戸大学農学部を卒業
し、神戸市に勤務する者を会
員として、昭和59年に結成さ
れました。現在は、会員1
20名(現職会員83名、OB
会員32名、名誉会員4名)を
数えています。

会員の勤務先は非常に幅広
く、小学校や中学校(教員)、
環境局(産業廃棄物や環境保
全に関わる仕事)、保健所や
区役所保健部(食品・環境衛
生に関わる仕事)、産業振興
局(農・水産・畜産業の農政
振興事務に関わる仕事)、建
設局(道路、下水道、公園な
どの土木関係)、フルーツフ
ラワーパークや六甲山牧場、
海釣り公園：など多岐に
わたっており、いろいろな現
場、さまざまな仕事にたざさ
わっています。

会の活動は、年1回の総
会・懇親会の開催および名簿
の発行であり、総会・懇親会
では、農学部長、六條会会長、
名誉会員である歴代学部長を
はじめ定年退官された先生方
のご出席をいただき、大学の
近況を伺ったり、当時の思い
出話に花を咲かせたりと親睦
を深める良い機会となってい
ます。

昨今の厳しい行財政運営が
求められるなか、安全で安心
なまち「こうべ」の実現に向
けて、それぞれの職場・立場
で会員一丸となり取り組んで
います。

県六條会近況報告

松本 幹夫(神A3回)

「県六條会」は
兵庫県に勤務する
(又、勤務した)
六條会会員もよ
り、昭和56年に結
成され、現在、会
員210名(内現
職会員159名、
OB会員51名)を
数え、その勤務先
は、農林水産部の
ほか、企画管理部、
県民政策部、健康
生活部、産業労働
部、県土整備部等
と多岐にわたって
います。



本会の活動は年1回の総会
兼懇親会と名簿発行ですが、
会員同士は、仕事の中で同窓
生としての良き連携と緊張の
もと、困難な仕事にも前向き
に取り組んでいます。
今年、10月15日に総会を
開催しました。眞山農学部
長、北浦同窓会長をお迎えし、農
学部の近況や大学時代の昔話
など、賑やかな会となりました。

役職名	氏名	卒年・回生	所属(勤務先)
会長	西尾 司	43年・兵Z16回	環境局
副会長	谷口 正夫	43年・兵Z16回	産業振興局 西農政事務所
副会長	中村 直彦	45年・神Z1回	産業振興局 農政計画課
副会長	岡 淳 治	45年・神T1回	財団法人 神戸市都市整備公社
幹事	木 股 昌行	45年・神Z1回	環境局 環境保全指導課
〃	菅 原 通直	48年・神C4回	保健福祉局 保健所 東部衛生監視事務所
〃	橋 本 宏之	51年・神Z7回	保健福祉局 健康部 生活衛生課
〃	渋谷 一郎	52年・神C8回	保健福祉局 保健所 西部衛生監視事務所
〃	高 谷 信之	52年・神A8回	産業振興局 農水産課
〃	森 川 功一	55年・神C11回	環境局 事業系ごみ対策課
〃	藤 井 俊宏	58年・神C14回	保健福祉局 健康部 生活衛生課
〃	鈴木 壽也	59年・神P15回	産業振興局 西農政事務所
〃	松 宮 道生	60年・神A16回	建設局 公園砂防部 計画課
〃	岡 野 光世	3年・神A22回	産業振興局 西農政事務所
〃	為 国 司	5年・神C24回	環境局 環境審査室
〃	角 村 朝榮	9年・神A28回	産業振興局 農政計画課
監事	斎 藤 允己	42年・兵A15回	淡河中学校
〃	千 代 栄司	46年・神A2回	建設局 公園砂防部 施設課
〃	中 尾 博行	46年・神P2回	財団法人 神戸みのりの公社

平成15年度役員
会 長 吉川 俊彦(兵15回)
副会長 板井 丈夫(兵16回)
副会長 塩 飽 是雄(神1回)
副会長 吉倉淳一郎(兵16回)
副会長 入江 和己(兵17回)

事務局
兵庫県農林水産部農政企画局
課長(農業経営担当)
担当 松本 幹夫(神3回)
電話 078-362-9196

関東支部の近況

支部長 和泉 孔庸 (兵C8回)

関東支部は去る7月12日、丸ノ内にある「神戸大学KU C」で第六回の支部総会並びに懇親会を開催しました。

当日は約40名の会員、本部からは北浦会長、中村代表理事が出席してください、奥谷名誉教授も元気なお姿を見せていただきました。

北浦会長の挨拶のあと、中村代表理事からは、六篠会の現況及び将来独立行政法人として運営される神戸大学農学部状況等について報告をしていただき、奥谷名誉教授からは近況並びに健康で元気な秘訣を拝聴しました。

懇親会では長瀬産業(株)の岩井常務(兵10)から「最近の経済情勢について」、姫路工大の辻教授(兵12)からは「高齢者の健康維持について」それぞれスピーチをしていただき、和やかな雰囲気の中で一時を過ごしました。出席者の皆様は学生時代の思い出を共有できる仲間が居ることの素晴らしさを実感されたと思います。

関東支部には会員が約1千名おられますが、転勤その他の理由で総会開催の連絡が不十分であった為か神戸大の出席者が少なかつたので、次回からは一人でも多くの会員に出席していただき、総会が交流、懇親の場となるようにと願っています。

又、関東には「神戸大学東京連絡会」なる組織があり、各学部同窓会が主催す

東海支部

副支部長 上田 洋 (兵C6回)



公務のため残念ながら欠席であったが、心こもったメッセージを寄せて戴いた。

総会では会計報告、同承認、今期役員承認、東海支部慶弔内規の確認、将来の東海支部の事業構想の披露、各自の近況報告と続き、夕刻からは懇親会で大いに盛り上がり、全員が参加した2次会のお開きは午前1時になったが、大変有意義な一夜であった。

2回に亘る役員会の打ち合わせを経て、9月27日、平成15年度(第3回)東海支部総会を三重県菟野町で開催した。「アグロサイエンス」の中心的役割を神戸大学農学部が果たしている現状並びに将来の展望について説明をしていただきました。

眞山教授の講演は当日の出席者に大変好評を博しました。特に文系出身者には新鮮なものであったと高い評価を得ております。これからは他学部長の講演を逐次実施する予定であり、詳細は神戸大学のホームページで紹介されていますので、機会をつくり参加していただきたくお願い申し上げます。

第1回、第2回は「山車と蔵のまち」半田市(愛知県)での開催であったが、今回は趣向をかえて「山と温泉と紅葉のまち」湯の山(三重県菟野町)での開催となった。鈴鹿国定公園の中央に位置する御在所岳は標高1,230m、晩秋には石灰岩と紅葉のコントラストが絶妙の絵になる三重県有数の名勝地である。この温泉はラドン泉で、源泉は御在所岳の下、恐竜時代の地層から湧き出る全国屈指の隠れた名泉である。今回、北浦六篠会会長は

学友会だより

学友会担当理事 西川 欣一 (兵A1回)

学友会はこの一年 学友会は神戸大学各学部を一本化した共同体で、神戸大学の公的行事について協議したり参加する会である。

「六甲ひろば」に学友会コーナー新設 神戸大学の公的情報誌「六甲ひろば」に平成15年4月15日(第68号)から新たに学友会の活動を伝えるコーナーが設けられた。

学友会としては、これに組織的に対応して実効をあげるために編集委員会を設けたが、六篠会から王子善清理事が編集員となった。

◆学長を囲む懇談会 平成15年6月25日、神戸市産業振興センターで開催。野上智行学長から平成16年4月より実施される国立大学の独立行政法人化に関する講演があった。

従来のような国立大学としての神戸大学ではなく、独立行政法人の一つとして「独立行政法人神戸大学」となること。これによって何よりも独自の財政力の強化が要請され、それと関連して注目に値する研究・教育活動を従来以上に求められる。

◆学友会幹事会 平成15年7月9日、神戸産業振興センターで開催。 1. 平成14年度会計報告 2. 学友会積立金の継続 3. コーベ・ユー・ドットコムの変更等が審議された。



◆神戸商船大学との統合と祝典 神戸大学は平成15年10月1日、神戸商船大学を統合し、11番目の学部として「海事科学部」を設置。大学院は自然科学研究科に専攻を設置した。 平成15年10月4日、神戸大学百年記念館六甲ホールに於いて、総合記念式典が挙行され、ひきつづき祝賀会が社会科学アカデミア館で催された。

KUCだより

交流の場「神戸大学クラブ」が創設20周年 KUC担当理事 能宗 康夫 (兵C2回)

神戸大学の全学部の同窓会で構成している「学友会」の活動する機関として、卒業生、教職員が気軽に利用できる「神戸大学クラブ(KUC)」が、神戸、大阪、東京で運営されている。このたび、神戸にある神戸大学クラブが産声をあげて今年で20周年を迎えることができた。この歴史も同窓生各位の支援の賜物と感謝している。

さて、平成14年秋に神戸元町にある「本館牡丹園」での再開を機に、新しい企画を検討した結果、活動・交流を活性化するために、定期的に講演会を実施することになった。その内容は、神戸大学の14部局の教官が交代で、偶数月の第一木曜日の午後6時から行うことになっている。今年度はすでに4月から、文学部を皮切りに国際文化学部、発達科学部、経済学部、法学部と実施しており、順次持ち回る。農学部は平成17年2月に担当する。講演会はホットな研究課題や関心のある話題をテーマに選んでいるので、どしどし参加いただきたい。また、希望の講師、テーマがあればお聞かせ願えば幸いです。

定例行事として、恒例の「ハワイアンとフラダンスの夕べ(9月4日)」をビールパーティーを兼ねて実施し、100名近い同窓生が集った。これらの他に、中国語講座、健康講座、英雄を語る会、旅行会、ゴルフ等を催している。なお、20周年記念講演会を平成16年2月7日(土) 11時



六條会 からの お知らせ

大学と同窓会の 連携強化を進めよう!!

代表理事 中村 直彦 (神Z1回)

時代の流れが大きく変わろうとしている中で、社会、経済の構造改革が必要に迫られている。大学にあっても、国立大学を国の直轄から切り離して独立法人化し、硬直化した大学の体質改善を図ること

にしている。即ち、大学運営の規制緩和と自己責任を問うことにより大学の活性化を図ろうとするものであり、これにより平成16年4月から87の国立大学法人が誕生する。

確かに今までの大学は、今日の社会とあまりにもかげ離れていた存在であったのかも知れない。しかしながら、独立法人化することで、大学の財政力の強化が要請されると



歴史を通して交流を深める学友船

また、独立法人化を前に、神戸大学と神戸商船大学が10月1日に統合した。これは、海に開かれ、国際的拠点大学のイメージを確立したい神戸大学と、海運業の低迷で方向転換を迫られる一方、海洋開発や海の物流など新たな分野への取り組みに対しては単科大学としての弱点があるため、総合大学として再生を図ろうとする神戸商船大学の方針が一致したものと

いえる。今後、大学を取巻く情勢はますます厳しくなるものと予想されるが、それを見守り、サポートしていくのが我々卒業生であり、同窓会としての

役割でもある。そのために13万人に上る卒業生がネットワークを組み、多様な形で同窓会に参画し、大学との連携に携わっていくことが重要になってくる。

時代を担っていく大学の動き、頑張る同窓生や同窓会の活動について、この1年の主なものを下記のとおり紹介いたします。今後とも同窓会に対して卒業生の皆さんのご理解と、積極的な参加、ご支援を賜りますようお願いいたします。

「大学、同窓会等の動き」

・神戸大学クラブの新講演演会において、平山敏氏(兵A13回)が、「成長する組織と減じる組織」と題して講演。「社会は大きく変わっている。新しい発想と取組みにチャレンジする必要がある。」と経験を踏まえた熱弁に参加者は傾聴した。(2月6日)

・毎月1回発行されている神戸大学の公的な情報誌「六甲ひろろば」に、4月から学友会(同窓会)コーナーが設置されることになった。来年度から国立大学法人化に移行するにあたり、このコーナーは、大学と同窓会との連携が強化されるものと期待される。

・学部生2,582名、院生1,240名(うち留学生126名)の入学式が、4月8日ワールド記念ホールで行われた。「大学の使命は、教育、研究さらに社会や地域に貢献することである。」などと学

長からの祝辞があった。神戸大学名誉教授称号授与式が、4月17日に挙行された。農学部では保田茂先生、岸原士郎先生。おめでとうござい

ます。

・「神戸大学農学部地域連携センター」が、6月16日に設立した。これまで農学部は、兵庫県、神戸市、農協中央会、コープこうべなどと研究交流を行ってきたが、地域が抱える農学分野の問題解決の拠点センターとして整備したも

の。農業者の高齢化、輸入農産物の増加と農産物価格の低迷が続く中で、これからの日本の農業をどう再生していくのか大きな課題だが、連携センターの活躍を期待したい。・加西市にある農学部附属農場が、「食資源教育研究センター」と改称されたことに伴い、7月4日に開所記念式典が行われた。今後、実学としての教育・実習のほか、生物資源の利用研究や地域社会・国際社会への貢献が大いに期待される。

法人化大学支援へ総力結集

株式会社神戸学術事業会代表取締役 高橋宣光 (昭和40年法学部卒)

すでにご案内の通り、株式会社神戸学術事業会は、来春に迫った国立大学の法人化を踏まえ、21世紀の世界に通用する特色ある大学への変革・発展をめざす神戸大学を卒業生・同窓生の立場から総力をあげて支援しよう、学友会と大学教員有志により設立された収益法人でありまして、大学の豊富な知の資産と13万人のぼる学友の人脈ネットワークを活用したさまざまな事業を展開し、その成果を国立大学法人神戸大学と同窓生およびそのコミュニティに還元していくことを目的としております。

この目的を実現するため、国内外で活躍する13万学友と大学を結ぶ情報基盤として独自のインターネットサービスKobe-u.com(コウベ・ユー・ドットコム)を立ち上げ、会員の互信と決意のための提携クレジットカード「KOBELINK」を発行致しました。発足1年半にしてまだ会員は千名程度に留まっておりますが、各同窓組織を通じて普及に努めるとともに、学内では課外活動サークルのメールアドレスを受注したほか、在学生による就職活動支援(Job-navi)への協力・援助などを通じて

学生への普及をめざしております。また、かねてからの懸案であった同窓会名簿データベースの一元化を進め、学友会と個人情報保護に関する覚書を取り交わした上、一部学部を除く同窓会名簿の基本情報をKobe-u.comで一括検索できるサービスを開始しました。これを充実することにより、就職・転職、ビジネスマッチング、産学連携、ベンチャー起業など全学友の人脈を活用した多種多様な事業を展開されるものと期待しております。

その手がかりとして、昨年の神戸大学創立百周年記念に発行された百年史写真集を限定出版・販売したほか、大学の新しいロゴマークをあらわしたポロシャツや応援団総製作の百周年記念学歌集CDの販売、医学書の出版などを支援、大手損保会社と提携して保険代理店業も開始致しました。また、同窓会や学内組織のホームページの製作、運営なども受注、サポート致しております。

これらと並行して進めておりますのが、法人化大学の事務の効率化や経費抑制を支援する取り組みです。国立大学法人といえども18歳人口の減少、グローバル

化による激しい競争原理の中で生き残りをかけて教育・研究部門のさらなる質的向上を図らなければなりません。そのためには、膨大な周辺業務や雑務は極力整理して、優れた人材の確保・育成等に効果的な資本投下ができるよう財務内容の改善を図っていかねばなりません。可能な限り自力で賄われることが理想ですが、外部に委託した方が合理的な業務もあります。事務・業務のアウトソーシングは、私学ですすでに常識ですが、留意しなければならぬのは、委託する業務の種類と業者の選定です。中でも業者の選定に当たっては質的・経済性・信頼性を従来より重視しなければなりません。その点、私どもが構築中の人脈ネットワークを活用すれば、すべて卒業生ですらまず信頼性はありますし、質的・経済面でもリーズナブルな業者をすばやく的確に選定することができるといえます。しかもそこから生まれる収益は大学に還元されることになるわけですから、大学にとってこれほど都合のいいことはありません。

「神戸大学のための収益法人」「神戸大学とともにある会社」として大学との連携をいっそう強化し、総力



